

受領者投稿

若手研究者への研究助成の意義

京都大学大学院工学研究科精密工学専攻 助教授 榎木哲夫

(第1回 受領者)

研究者にとってかけがえのないもの、それは自らを導いて頂いた良き恩師の存在であり、研究環境であり、経験であろう。8年前、幸運にも本財団の第一回研究助成金（平成2年度）を頂く機会を得た。まとまった額の研究費の助成は、当時初めて研究者として立ち立ちていく資格を与えて頂いたような喜びを感じたことを今でも憶えている。筆者の場合、恩師の助言により、思い切って海外に一年間身をおき、研究以外の雑用から解放され、自由に進めたい研究についてじっくりと考えてみることにした。そして頂いた助成金はそのための滞在資金の一部として活用させて頂くことで本財団事務局にご了解頂き、13ヵ月に渡って米国スタンフォード大学での客員研究員としての滞在が可能になった。有り余る自由な時間、それまで文献で何度も見てきた著名な学者達の頻々たる講演、活気溢れる教官予備軍のポスドクや博士課程学生とのセミナー、どれを取り上げて今となっては得難い貴重な研究環境であり経験であった。そして何より若い時期にこの助成を頂いたことをいま心から感謝している。同じ助成金が仮に現在得られていたとしてそれはまた違った用途になっていたに違いない。

当時わが国での各種知能化技術のブーム的な盛り上がりをもよおし、向こうでは人間を系に取り込んだシステム全般に渡る設計論について、マネジメント・組織論や人文系の学者

を取り込んだ学際的な土俵の上で議論されていることに懐の深さを感じたものだった。今日我々を取り巻く巨大化した人工システム、そしてこのシステムに様々な人間がかかわり、さらに環境が陽に陰に作用する。いまや利便性を提供する側とされる側のインタフェースが、そしてテクノロジーと人間とのインタラクションの有り様が問い直される時期に来ている。米国滞在時に議論されていた内容は、確かにテクノロジー主導の工学から人間・環境との調和を目指した工学へのシフトを見通した議論であったことが思い起こされる。かような貴重な研究環境と経験を得る機会を与えていただいた本財団に改めて感謝申し上げるとともに、今後も末長く若手研究者への支援にご尽力賜わることを期待してやまない。

